

野口英世の業績の一つに、「南米エクアドルで黄熱病の病原体を発見した」というものがある。1919年のことだ。後の研究から、英世の発見した病原体はウイルス病(黄痘出血性レプトスピラ病)の原因菌だったといわれている。

ウイルス病は、ネズミなど野生動物を自然宿主として、ほとんどの哺乳類に感染する。腎尿管で増殖し、排せつ物を経由して汚染された水や土壌から口や皮膚に感染する。日本でも70年代前半までは年間50人ほどの死亡が報告されている。悪寒、発熱、頭痛、全身の倦怠(けんたい)感、眼球結膜の充血、筋肉痛、腰痛など急性熱性疾患の症状を示す。重症型で



やまもと たろう
山本 太郎



野口英世と井戸泰

3)年、九州帝国大学内科教授であった稲田龍吉と井戸泰によって発見され、翌15年1月、第54回九州帝国大学医科大学集会で「ワイル病病原スピロヘーター確定に関する予報」として発表された。稲田と井戸は、この業績でノーベル賞候補となる。

18年(大正7)年、アメリカに立ち寄った井戸を港に迎えたのが、野口英世だった。英世41歳、

ペイン風邪が原因だった。

一方、アフリカで研究に携わっていたアドリアン・ストークスは、黄熱病は、ろ過性病原体(現在のウイルス)によって引き起こされると発表。26年には、黄熱病ワクチンの開発で後にノーベル賞を受賞するマックス・タイラーが、英世の説は間違っていると発表した。

は、黄痘、出血、肝臓・腎臓障害が見られ、全身出血を伴うこともある。

ウイルス病の病原体は、14(大正

井戸36歳。翌年、井戸は、京都への学会出張中に体調を崩し、37歳の若さで他界した。妻と3歳の子どもを残して、世界を席巻したス

自らの正しさを証明するため、27(昭和2)年11月17日、英世はアフリカへ渡り、ガーナの首都アクラで黄熱病の研究に着手。しかし半年後、自らが黄熱病に感染し、翌28年5月21日、アクラで永眠する。享年51歳。井戸が亡くなって9年後のことだった。

(長崎大熱帯医学研究所教授)